

ある日の屋下がり。なしこまどんはいつものように、神社の鳥居の前でひなたぼっこをしてたいた。

「ふう。今日も平和どんね！」

おもわずそんな言葉が漏れちやうくらいのぽかぽか陽気に、すーっと眠つてしまいそうになつた時、神社に続く階段からとぼとぼと一人の男の子が歩いてきた。

ランドセルを背負つて下を向いて、ため息をついている姿は見るからになにか思い悩んでいるようだつた。

そんな悲しそうな男の子を見たなしこまどんはひょいと身体を起こすと、見えないように透明化させていた身体をどどんと実体化させた。

「どーん！」

「うわっ！ なになに!?」

勢いよく現れたなしこまどんに男の子は目を丸くしながら目の前に現れた緑色の妖精をじつと見ていた。

「こんにちは。おれっちの名前はなしこまどん。君のお名前は？」

「えつと、僕は九条拓斗。^{くじょうとう}いきなり現れるなんて、びっくりするじゃないか」

なしこまどんはごめんごめんと頭を搔く。

「ところで、拓斗はどうしてあんなにおちこんでいたんだどん？」

「ああ、みられちゃつてたか」

なんだか、恥ずかしそうにしながら拓斗は話し出した。

「僕、最近こち辺に引っ越してきてさ。この街で上手く生活できるのかなつてすぐ心配しちやつててさ……もう食事もなかなか喉を通らなくて……」

「なるほど、そんなことだつたどんね」

「そんなことって、僕にとつては一大事なんだぞ！」

「それなら、おれっちにいい考えがあるどん。拓斗に、この街のいい所をおれっちが自ら紹介してあげるどん！」

大きく胸を張りながら言い切つたなしこまどんはついてきてと拓斗の手を握ると、とことこと、どこかに向かつて歩き出した。

「ねえ、これつてどこに向かつてるの？」

歩きながら拓斗はなしこまどんに話しかける。

「それは着いてからのお楽しみどん！ まあひとつ言うなら……手つ取り早くこち辺の良さ

を知ることが出来る場所どん」

拓斗はきょとんとしながらなしこまどんの顔をみている。

なしこまどんは変わらぬ表情のまま歩き続ける。

「まあまあ、まずは向かつてみるどん！　口が沈むまでにやることを終わらせるどんよ～！」

「ま、まつてなしこまどん！」

もつとスピードを上げたなしこまどんを見失わないように走つていると、拓斗の息が上がつてきた辺りでなしこまどんの足が急に止まつた。

「ついたどん！」

「はあ……はあ……やつと着いたの……？」

拓斗は膝に手をつきながら絶え絶えに呟いた。

一分近く休んで、ひとまず疲れの波が引いてきた頃、ようやく拓斗がその顔を上げ、目的地を見た。

「うわあ……ここがなしこまどんの連れてきたかった場所？　ところでここつてなんなの？」

目の前には大きな建物が建つていて、ガラス越しの建物の中にはいろんな食べ物が並んでいて、拓斗にはただのスーパーのようにしか見えなかつた。

「ここはこの街で一番大きな直売所なんだどん！　ここで売られている野菜とか、お花とか、加工品までこのあたりで作られたものなんだどん！」

「こ、こんなに？　すごいな……」

拓斗は感心した様子で直売所を外からじっと眺めていた。

「ほらほら、早く入つてみるどん！」

わくわくした様子のなしこまどんに腕を掴まれながら、二人はとことこと直売所の中へと入つていった。

中に入つてみると、地域の人たちの声がそこかしこから聞こえてくる。

拓斗の想像していた直売所のイメージよりも広くて近代的な見た目にわあつと声が漏れる。

あたりを見渡している間にもなしこまどんは手当たり次第にいろんな食材たちを買い物かごへと入れていく。

腕にかかる重みに驚きながら手元をのぞいてみると、だいこんやネギなどがかごの中に入つていた。

「ちょっと早いってなしこまどん」

「ふふん。心配しなくても大丈夫だどん！　こう見えても食材の良し悪しを見極めるのはとくいなんだどん」

陽気に答えるなしこまどんにちょっと不安感を感じながらも、もう一度買い物かごの中をの

ぞいてみると、たしかに中の食材たちは新鮮そうに見えた。

「ま、そんなに意識しなくてもここで売っているものは全部新鮮だから誰でも安心してかえるはずだ。それに、そこら辺のスーパーよりも安いのも特徴だ」

「へえ……なしこまどんって何でも知ってるんだね」

「ふふん。こう見えてもずう～っとこの地域の安全を守ってきたありがた～い狛犬なんだ」

拓斗にこのあたりの良さを伝えるならおれっちより優れている人はいないって断言できるどん！」

胸を張って答えるなしこまどんは褒められたことで笑顔になりながら、スキップ交じりにレジの方へと向かっていった。

「ち、ちょっとこれ買いすぎじゃない……？」

買った食材を全部袋に入れてみると、その量は二人で食べるにしてはとても多く感じた。

「そこについては大丈夫だ。とりあえず神社に戻るどんね」

小さな体によいしょと袋を持ちながら、なしこまどんたちはもう一度神社の方へと歩き始めたのだった。

直売所に向かった時よりも荷物のせいで数倍重く感じる足取りの中、二人はようやく元の神社へと戻ることが出来た。

なしこまどんと初めて行ったときにはまだ昼のぽかぽか陽気だったのに、気づいたら空はオレンジ色に色付き、涼しげな風が疲れた二人の身体を冷やしてくれているようだった。

「ふう……なかなか疲れたどんね。えっと、有希は……」

「あつようやく来た。おかえりなしこまどん」

神社の奥から聞こえてきた声の主はなしこまどんに近付くと頭を撫でながら拓斗の方を見た。

「この子がさつき言つてた男の子？」

「そうだ。名前は九条拓斗くんだ」

「へー。よろしくね、拓斗君。私の名前は安室有希。あむろゆき。気軽に有希でいいよ。普段はここの中巫女さんやつてたりしてるんだ」

「よ、よろしくおねがいします」

緊張した様子の拓斗に有希はニコッと微笑みかける。

「言われた通りにガスコンロとかいろいろ持ってきたけど何を作るつもりなの？」

「今日は地域の食材を使ったおいしい鍋を作るつもりだ！」

「ふーん鍋ね。ま、いいんじやない？」

「拓斗はどうどんか？」

「僕も多分大丈夫……かな？」

「ようし！ それなら早速作り始めるどーん！」

「ところでさ、神社でこんなパーティームみたいなことつてして大丈夫なの？ 神様に怒られた
みんなで神社の端っこの方へと移動し、買ってきた食材や調理器具をレジャーシートの上に
広げていった。

「そこは大丈夫どん。おれっちが今日だけは大目に見てあげるどん」

「……なしこまどんつてそんなに偉いの？」

拓斗は疑いの表情を浮かべながらじつとなしこまどんのことを見つめる。

「もつちろんだん！ おれっちは長い間この地域を守護してきた狛犬なんだん。神様とだつ
て友達なんだん」

「私もよくわかんないけど、なしこまどんがそういうなら大丈夫なんじやない？ ほら、私に
任せっきりにしないでみんなも手伝つてよ」

「うう……ネギかあ……」

有希に急かされながらみんなで協力をして食材を切つたり、鍋に入れたりし始めた。

「拓斗はネギが苦手なんだん？」

「うん。ちょっとね。どうしてもネギの辛味とかが好きになれなくてさ……あんまり食べれな
いんだ」

「ふーん。そういうことなら、むしろネギを買つてきたのはよかつたんじゃない？」

有希がなしこまどんに對して目くばせをすると、なしこまどんはよいしょと声を出しながら
自身の首に巻いてあるマフラーを脱いで拓斗のほうに見せつけた。

「このマフラーはいま拓斗の持つているネギと同じ矢切ネギつて名前のネギなんだん！ こ
のあたりでは有名なブランド野菜なんだん」

拓斗はへえと声に出しながら手に持つたネギに視線を向けた。

「たしかにかなり太くてボリューム感があるけど僕が気にしてるのはそこじやなくて……」

「へへ、矢切ネギの良さはそこだけじやないどんね～」

「拓斗、ちょっと口開けて？」

拓斗は有希の言葉に反射的に口を開くと、いつの間にか切られていたネギのかけらをひよい
と口の中に入れられた。

「ちよつ！なんですかいきなり！」

「いいからいいから食べてみ」

吐き出すわけにもいかずおそるおそるかじつてみると、想像と違つた感覚に驚きながらかみしめる。

「あ、甘い……？」

「そ。このネギはほかの品種に比べてすごく甘いんだよね。どう？ 大丈夫そう？」

「……はい、多分これなら大丈夫だと思います！」

「それならよかつたどん！ ほかにもいろんな特産物を用意したからたのしみにしておくどん！」

それからというもの、なしこまどんと有希による買つてきた食材たちの特徴の講座を聞きながら準備をしていると、いつの間にか準備は終わっていた。

「いよっし！ 完成つと！」

陽気な雰囲気の有希が蓋を開くと、大きく湯気が立ち上がりながらいろんな食材たちが湯の中で踊つている姿がのぞいてきた。

「いいかんじどんね！ 成功だどん！」

「ほら、早速食べてみてよ」

そういうつて有希は拓斗に鍋をよそった小皿を渡した。

拓斗は小皿を受け取ると、ちよつと抵抗感を感じながらふと一人のほうへと視線を向けた。
「大丈夫だどん！ おれっちたちが見守つておくから思いつき挑戦してみるどん！」

「う、うん！ いくよ！」

再び意気込んでがさつと取つた食材たちを一気に口の中へと頬張つた。

「ど、どう？」

なしこまどんと有希が拓斗の顔を物珍しそうにのぞき込むと、拓斗は思い切り顔を上げた。

「うん、おいしい！」

拓斗の顔には、昼頃の暗い表情はなくなり、満面の笑みがこぼれそうなほど満ちていた。
「よかつたどん！ すっかり拓斗も笑顔になつてくれて、おれっちもうれしいどん！」

「ふう、ちゃんと作れてよかつたよ。ほら、しつかり食べなさい」

それからなしこまどんと有希も一緒に鍋を食べ始め、數十分がたつたころにはいつの間にか鍋の中はすっからかんになつていた。

デザートとしていちごや梨も用意してあつて、拓斗は満足感に包まれていた。

「どうだつたどん？ ちよつとはこの辺りのことをわかつてくれたどんか？」
なしこまどんの問い合わせに対して拓斗は残つた梨を一口頬張りながら答えた。

「うん。今までこうやって地域の特産品とかについて考えたこともなかつたけど、こうやっていっぱい理解するとなんだか怖く無くなつてきた気がする！」

「ふふ。それは良かったどん！」

拓斗はよしと意気込むと元気いっぱいにランドセルを背負つた。

「それじゃあ僕はそろそろ帰るよ！ 2人とも今日はいろいろ助けてくれてありがとう！」

「こちらこそ楽しかつたよ」

「気をつけて帰るんだぞーん！」

大きく手を振りながら帰る拓斗に合わかるように太陽は街全体をきらびやかに照らしていた。残つたいちごを口に放りながら有希が語りかける。

「良かったねなしこまどん。あなたのこの街への愛が伝わつたみたいでさ。大手柄じゃん」

「おれつちはただこの街のありのままを拓斗に伝えただけどん。つまりはこの街が、拓斗の大好きな街だつただけどん。そんなみんなが好きになれる場所だからこそ、おれつちはずっとずっとここが好きなんだどん！」

胸を張つて答えるなしこまどんに有希はポンポンと頭を撫でる。

「そうだね、私もこの街が好きだよ」

次の日、学校の扉を開ける拓斗はいつもよりも上を向けていた。昨日よりも広々とした教室に入ると、先に来ていたクラスメイトの輪に近付き、元気よく喋りだした。

「おはよう！ 聞いて聞いて！ 昨日実は面白いことがあつてさ！ 小さな狛犬にこの街の魅力を教えて貰つたんだ！」